

高齢者の精神的充足感形成に関する研究 I

— 高齢者の精神的充足感獲得の実態とその要因の分析 —
 広島大教育 ○ 岡本祐子

【目的】高齢者の精神的充足感獲得の実態を把握し、それに関連する生活的・心理的要因を分析する。

【方法】(1)調査対象者：広島県に在住する65歳以上の高齢者1736名(男854名, 女882名)

(2)手続き：精神的充足感スケール(I. 日常生活・活動の充実感、II. 人生の意義の認識・自分の人生の受容、III. 自分の人生の目標の達成感、IV. 肯定的な自己像、V. 肯定的な将来展望・楽天的態度)、生活の諸側面に対する満足度、活動・意識への主体的欲求の有無からなる質問紙。

【結果】(1)高齢者の精神的充足感獲得に関連する外的要因：①家族構成：精神的充足感得点は、配偶者と2人暮らし>3世代同居>2世代同居>1人暮らしの順に有意に高得点を示した。②職業：現在の職業では主たる相違は見られなかったが、退職前の職業では、管理・専門技術・事務職群が他群よりも有意に高い得点を示した。

(2)生活の諸側面の満足度と精神的充足感の関連性：「自分の健康」、「経済状態」、「友人関係や社会生活」、「自分の仕事」、「他人や社会に対する貢献度」、「自分のしている仕事・活動に対する他人からの評価」のいずれの項目についても、満足群は不満群よりも有意に高い精神的充足感得点を示した。

(3)活動や意識などへの主体的欲求の有無との関連性：承認、挑戦、成長、責任、奉仕・貢献のそれぞれについて、これらの感じをもちたいと答えた人の割合は、12.6~20.2%とかなり低かった。しかしこれらの「主体的欲求有」群は「無」群よりも有意に高い精神的充足感得点を示した。活動や自由の範囲、心的エネルギーの減少などにもかかわらず、高齢期になお、このような主体的欲求を有していることは、精神的充足感獲得にとって重要な要因であることが示唆された。